



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No. 6 1997.8.

目次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	土木史研究発表会における甲突川五石橋の論議	1
フォーラム	東山道から武蔵国府に入る道 早川 泉	2
地域のニュース	心斎橋の復元と『心斎橋筋の文化史』の出版	3
	金沢城跡から埋もれた石積みを発見	3
海外土木史	ホイアン（ベトナム）の日本橋	4
関連学会ニュース	「土木の文化財登録をすすめる会」の結成	5
	文化財登録制度の現状	5
学会の動き／土木史関係図書	土木史研究委員会幹事会報告	6
	平成9年度土木史フォーラム小委員会構成	6
	第17回土木史研究発表会報告	6
	『伝えたいふるさとの石橋』	6
	第18回土木史研究発表会開催と論文募集	7
行事案内	産業技術歴史展 『テクノフェスタ21』	8
	セミナー『土木の歴史が語りかけるもの』	8

土木史ニュース

土木史研究発表会における甲突川五石橋の論議

去る6月の第17回土木史研究発表会では、鹿児島市内を流れる甲突（こうつき）川五石橋に関わる論文が13編も発表され、昨年の関係論文を併せると22編の多きにわたるだけでなく、会場ではそれぞれの立場から熱心な討議が行われた。

土木史研究発表会の歴史の中で、一つのテーマでこれだけ多くの論文が集中的に発表されたことはこれまで例がなく、土木遺産の保存に関して本土木史研究発表会が重要な論争の場になっている事実を浮き彫りにしたものといえる。

五石橋は鹿児島市内を貫通する甲突川に架かる石造りのアーチ橋で、市街地内4km部分に上流から玉江・新上・西田・高麗・武之の各橋が、1845年から同49年にかけて往時の薩摩藩が肥後の国から石工岩永三三郎ほかを招請し、総工費16,000両を使って建造させた。五橋の規模は、幅員4.9m～7.7m、延長44.7m～69.5mで、武之橋が5連である他は、4連構造である。

今日この五石橋の評価が国内的に高い由縁は、江戸期につくられた4連以上の構造をもつ石橋が①甲突川に限定されている、②材質や空間構成等美的要素が多い、③当時の高度な土木技術によってつくられた、④九州の他の地域で建造された石橋とは異なることが多いこと等にある。

これらの石橋は、甲突川の兩岸を結ぶ交通路となり、とりわけ橋梁幅員5.9mの高麗橋は、幹線機能を果たしていた。このため1963年10月には幅員25mに改築する都市計画決定がなされている。

この頃すでに一部の市民による石橋保存運動があり、行政側と市民側の対立から、1969年、市側は高麗橋の架け替えは断念したが、県と市は石橋

の国の文化財指定には同意しなかった。

五石橋の保存と治水対策について、行政側は河道の整備をはじめとする諸案の研究・検討を進め、一方の住民側も独自の案を示していた。

しかし1993年8月6日の未曾有の豪雨によって、甲突川流域で1万1千戸以上の家屋が浸水流失し、死者も出る被害に遭い、五石橋のうちの上新橋と武之橋の2橋が、一部を残して流出する事態となった。この災害により、甲突川に「河川激甚災害対策特別緊急事業」が適用され、5年間で河床の掘下げを中心とする事業が急がれた。このため根入れの浅い3橋は移設保存することとされ、「緊急抜本的復旧計画」を主張する行政側と「石橋の現地保存を含む長期的治水計画」を主張する住民側との合意が得られない中で、玉江橋、高麗橋は市により、県指定文化財の西田橋は県によりすべて撤去された。これらの橋の解体によって、建造当時の詳細な土木技術が明らかになった。その後住民グループは、県が西田橋を撤去したことについて、知事の責任賠償を求め争いが続いている。なお行政側は、災害で残った3橋すべてを、臨海部の祇園之州公園で復元することに決めている。

今回の発表会では、土木工学的立場からの真に学術的内容を主とした論文の他、石橋撤去にかかわる行政側の判断や対応また措置について批判を加える論文発表があった。しかし本学会の学術的性格や立場から、行政側と住民側との争いを主とした内容の是非を深く論じることには、一部違和感と限界のあることが感じられた。

（堀江 興）

東山道から武蔵国府に入る道

早川 泉（東京都教育委員会）



『続日本紀』宝亀二年（771）十月巳卯条の官奏で「上野国邑楽郡ヨリ五箇駅ヲ経、武蔵国ニ至ル」とわずか十数文字で記された東山道本道から武蔵国府に至る官道が、いずれのルートを取ったかは諸説があり定かではなかった。

1980年代中頃、武蔵国府・武蔵国分寺跡・所沢市東の上遺跡から、側溝心々距離12m幅の直線道路が発掘され、それらが同規模同形態の遺構であったことから、歴史地理学者を中心に「東山道武蔵路」とであると主張されるようになった。

道路は国庁推定地である府中市大国魂神社東地点から西約1100mの国府域西限地域にある。ここから武蔵国分寺と尼寺の中間地を抜け、狭小丘陵の東端で、やや西に偏し東の上遺跡を経て、北上して群馬県太田市方面に向かう路線をとる。

これは、かつて坂本太郎氏が推定した武蔵国の中央部分を南北に貫く路線と概略同一であった。

平成8年の西国分寺地区の調査で検出された道路遺構は340mに亘り、その長さや保存状態の良好な点、武蔵国分寺跡の隣接地で、律令国家の地方支配を考える上で極めて重要であると指摘され、土木学会を初め多くの団体の尽力により保存されることとなった。現在、事業部局・教育委員会・市民団体・調査団・観光協会で構成する保存活用検討委員会で話し合いが持たれている。

道路遺構の調査から多くの事柄が明らかになった。ひとつは道路の4時期変遷である。第1期は側溝心々距離12m幅の道路で、土坑を連結したような側溝に特徴がある。第2期は第1期側溝が埋没した後に、その上面を走行した時期であり、溝幅と同幅の硬化面が側溝上面に認められた。第3期は側溝心々距離9m幅の道路で、逆台形の浅い側溝である。第4期の道路は側溝を伴わない約6m幅で、皿状に浅く窪んだ道路敷きの中央部分に硬化面が存在する。この道路は調査区北側で直線道路から東に逸れ谷地斜面を下って行く。

各時期の年代を明らかにする資料はほとんど無い。第1期は東の上遺跡の西側溝から出土した7世紀第3四半期の須恵器坏と蓋から、この年代観が与えられているが、武蔵国の状況を考えると資料の増加を待ちたいと思っている。

下限を示す資料は幾つか存在する。東の上遺跡で8世紀第2四半期、武蔵国府で10世紀代の堅穴

建物跡が第1期側溝上に築かれている。これが8世紀第2四半期に埋没していたことは、文献資料と機を一にして「東山道武蔵路」としての機能が消失していたと考えられる。

しかし、中央部の硬化面には堅穴建物跡などの進出は見られず、その後も道路として使用されていた。それは第4期路面から転石化していない10世紀末の須恵器坏の破片が出土したことから伺える。その後の道路は武蔵国府から入間郡街へ向かう「入間路」として機能していた。

側溝や路面からも幾つかの知見を得ている。第1期道路の特徴のひとつに側溝の掘削方法がある。細長い土坑を連結し一条の溝にする方法で、溝の底面には掘り残された地山の高まりと所々に土橋状の断点ができる。この溝掘削方法を「土坑連結式掘削工法」と呼称する。

残された路面は第4期道路に付随するもので、硬化面は皿状に窪んだ底面に認められる。この窪みは長年に亘る風雨や人馬の走行により削られたもので、意図的な掘削によるものではない。

硬化面も造道時に波板状凹凸面を作出し、それを路床とし、その上を意図的に叩き締めたとする意見がある。意図的に叩き締められたものと、人馬の走行によって長年踏み締められたものとを、考古学的に判断することは困難である。

路面には、人馬の足跡など多くの痕跡が残されており、それを分析することで多少なりとも当時の交通の様態に迫ることができる。波板状凹凸面を当時の運搬具である修羅を牽引するさいの枕木やコロの圧痕と理解できたのもその成果である。

今日の土木技術水準から見ると、古代官道の造道技術はなんとも稚拙であるが、その構想においては、現在に引けを取らない雄大なものがある。中央と全国60余国を主要幹線で最短距離で結んだ結果は、辺境の異変に直ちに軍勢を送り込むことができたし、法の伝達、徴税、巡検など国家支配の根底を支える機能を有していたのである。

古代道の考古学的研究はまだ始まったばかりである。その草創期に、推定「東山道武蔵路」が保存できたことは幸いであった。開発と文化財、これは決して対立するものではないと思うのである。

地 域 の ニ ュ ー ス

心斎橋の復元と『心斎橋筋の文化史』の出版

大阪市の中央部に位置し、大阪市の東西軸の一つである長堀通の整備事業がほぼ完了した。昨年開通した地下鉄につづいて、1000台強収容の地下駐車場と800mに及ぶ我国最大規模の地下街（クリスタ長堀）が平成9年5月にオープンした。

ここには江戸時代の初めに開削された長堀川があり、大阪最大の商店街を結んで心斎橋が架けられ、大阪の名所になっていた。しかし交通事情の変化などにより、昭和30年代には川が埋め立てられ、橋も撤去されてしまった。今回の整備事業の中でこの名橋を顕彰することになり、保存されていた明治期の旧心斎橋の高欄やガス灯を現地に設置して、心斎橋の一部が復元された。橋はガラス屋根を通して地下街からも見えるように工夫されている。

この事業の完成に合わせて地元の心斎橋商店街では『心斎橋筋の文化史』を出版し、文化史展を開催した。このように、施設づくりに合わせて、イベントと出版を組み合わせることはその施設に対する認識を深め、それを核にした文化を醸成するきっかけになるものと思われる。

『心斎橋筋の文化史』は、江戸時代から明治、

大正時代の心斎橋や商店街を画いた錦絵や写真や文献を豊富に収録し（カラー80頁）、橋や街の歴史や風俗に関する8人の専門家の論文も掲載し、充実した内容になっている（A4版全203頁）。

実費：並製2000円、上製（ハードカバー）3000円

ご希望の方は、送料610円を添えて、下記まで。

〒542大阪市中心区心斎橋筋2-1-24松原ビル3F

心斎橋筋商店街振興組合 TEL. 06-211-1114

FAX. 06-212-0116

（大阪市都市工学情報センター 松村 博）



地下街の上に一部が復元された心斎橋

金沢城跡から埋もれた石積みを発見

平成9年4月下旬、金沢城跡の二の丸跡付近で旧二の丸御殿を守る内堀の一部とみられる石積みが見つかった。

二の丸は城郭のほぼ中央部に位置し、本丸、東の丸に次ぐ高所にあり、北縁から東縁にかけては内堀によって三の丸と区画されていた。今回石積みが見つかったのは、二の丸の外郭「五十間長屋」の石垣に隣接した地点である。廃藩置県後、この地は旧陸軍省所管となり各種軍施設が設置され、また戦後は金沢大学教育学部の敷地となり建物が設置されていた。このたび大学が郊外に移転したことから、県埋蔵文化財センターが本格的発掘調査を開始し、この石積みの発見となった。

石材はすべて戸室石（金沢近辺の戸室山から切り出した石）で、内堀に対する二の丸・五十間長屋の石垣と同じ形態で積まれていた。県センターでは本石積みが内堀の一部であることは間違いないとみている。この五十間長屋の石垣と本石積み間の距離から、内堀の規模や形状が特定できたことで、これまで絵地図から推定されていた建造物が実際に確認されつつある。

さて、藩政期の金沢城の地は、加賀藩の政治の中心地であった。その後陸軍そして金沢大学と姿を変えてきたが、最近大学が移転したため、その利用方法が話題となっていた。平成8年石川県は

これを都市公園として利用することに決定、県都金沢市の都心部に約28.5ha、東京ドームの6倍以上の広さの「金沢城址公園」として生まれ変わるようになった。450年の間、一般に開放されなかったこの地が、今ようやく県民共有の空間として活用されようとしている。江戸後期の歴史的な土木遺産を大切に保護するとともに、公園内に可能な限り自然を残し、県民に憩いの場を提供する計画が進められる。平成13年には、城址公園を主会場とする全国都市緑化フェアが開催され、石川県の新しい顔として全国にお披露目することも予定されている。（金沢大学大学院 安達 實）



新たに確認された石積み—金沢城・二の丸跡—

（北国新聞1997.4.22より）

ホイアン（ベトナム）の日本橋

ホイアンはベトナム中部のダナン近郊の都市で、江戸時代はじめまで日本人町があったことから日本との馴染みが深い。このホイアンには、日本橋と呼ばれる歴史的な橋がある。

ホイアンは、古くから海のシルクロードの交易拠点として栄え、16世紀から17世紀には日本の朱印船が立ち寄り日本人町が形成された。日本人町の発展とともに建設されたのが、日本橋で、その後来遠（Lai Vien）橋とも呼ばれるようになった。

この橋の建設時期は一説には、1593年といわれているが、現在の橋はそこまでさかのぼるものではなく、上屋の梁につけられた年号は1763年である。橋長約20m、幅員約5mで、石造の梁が4基の橋脚で支持された桁橋構造である。橋上には木造の建屋があるいわゆるカバードブリッジである。橋の上流側には約7m程の張り出し部があり、小さ

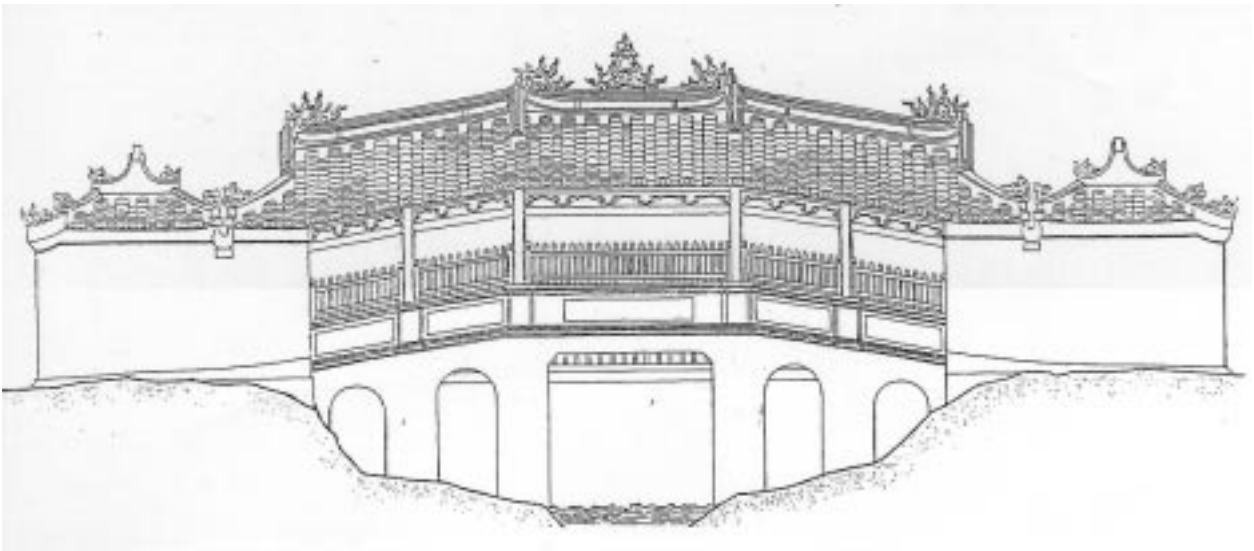
な寺が設けられている。

この建屋は1986年に一度修復を受けているが、その後橋とこの張り出し部に亀裂が入ったり、建屋の屋根の損傷も進んだ他、橋脚部などの構造部材にも損傷があり、近いうちに何らかの補修が必要とされていた。今はバイクの通行が禁止されている。

橋の管理者であるホイアン市人民委員会では、昨年、橋桁の補修を行い、さらに建屋の修理に着手する予定である。隣接して車両用の橋を建設する計画もあるが、景観上からは配慮を要するところだ。

わが国では、昭和女子大学国際文化研究所を中心とした調査チームがホイアンの町並みの保存に協力してきたが、この橋の補修にも協力を進めている。

（千葉大学大学院自然科学研究科
教授 福川 裕一）



ホイアンの日本橋一般図（提供：福川 裕一）

小林 一郎 氏 土木学会論文賞受賞

平成8年度土木学会賞が決まり、第83回通常総会において授賞式が行われた。土木史研究委員会の関連論文では、小林一郎氏（熊本大学助教授）の「世界初の本格吊橋トゥルノン橋の建設について」が論文賞を受賞した。当論文はマルク・スガンを中心としたスガン兄弟が1825年にフランス・ローヌ河のトゥルノンに架けた2径間ワイヤーケーブル吊橋の基礎工および上部工の建設過程を明らかにしたものであり、第16回土木史研究発表会（1996.6.秋田大学）において審査付部門で発表されている。

関 連 学 会 ニ ュ ー ス

「土木の文化財登録をすすめる会」の結成

「土木の文化財登録をすすめる会」（会長 高橋 裕 芝浦工大教授）が結成され、その発起人準備会が、5月13日午後6時から土木学会で開かれた。文化財の登録制度がこの4月に発足したのが、この会を結成する直接の動機であった。とはいえ、数年前から前島郁子さんをはじめ何人かの女性が、土木事業の成果、土木構造物、土木施設、土木技術について社会に正当な評価を求める運動を実施して来たのが底流になっている。

前島郁子さんは土木技術者を御主人に持っておられる関係もあり、近年マスメディアを中心として、土木事業について悪評が流れていることを深く憂えて、土木とそれに携わっている人々が正当に評価されるために努力されてきた。その一環として今回の会の結集を多くの関係者に呼びかけていた。

準備会には、建設省OBの谷藤正三氏、建築史の村松貞次郎氏、建築家大谷幸夫氏、土木史分野からは新谷洋二、伊東孝、篠原修、佐藤馨一の各氏、そのほか市民団体の方々、土木学会事務局など約20人が出席した。

準備会では、新谷教授から登録制度発足までの経緯、現状などの紹介があったのをはじめ、今後、登録候補について検討し、登録制度を盛り立て、それを通して土木事業について土木学会の協力も得て、一般へのPRにつとめることなどが合意された。近く正式の発起人会において今後の具体的な行動を審議することになった。

なお、同会の連絡先は以下の通りである。

前島郁子（〒171豊島区雑司ヶ谷1-24-14）

杉浦幸子（〒921金沢市弥生1-24-28）

佐々木葉（〒466名古屋市中昭和区汐美町53-D2）
（高橋 裕）

文化財登録制度の現状

平成9年7月現在、新しい登録制度のもとで文化財登録された土木構造物は以下の通りである（資料提供：文化庁）。

登録された文化財建造物（土木）

名 称	所在地	建設年代	特徴等	種別 1	種別 2	登録基準
旧舟木橋	三重県度会郡大宮町 多気郡大台町	明治38年	旧県道の道路橋。煉瓦造の橋脚に特徴。路面は昭和9年の改修。	土木	交通	3
筑後川昇開橋 （旧国鉄佐賀線筑後川橋梁）	福岡県大川市 佐賀県佐賀郡諸富町	昭和10年	船舶の交通の便のため中央部が昇開する 大規模な可動橋。	土木	交通	1
明治岡本井路 （石垣井路）	大分県竹田市	大正10年代	石垣の堤を築き上部を水路とした農業用水施設。	土木	産業1次	1
若宮井路笹無田石拱橋	大分県竹田市	大正6年	2連アーチの石橋の上に水路をとった農業用水施設。	土木	産業1次	1
勝沼堰堤	山梨県東山梨郡勝沼町	大正6年	切削した岩盤と石積みをあわせて造った 砂防堰堤。	土木	治山治水	1
祝橋	山梨県東山梨郡勝沼町	昭和6年	その形から眼鏡橋の愛称をもつ コンクリート造の道路橋。	土木	交通	1
明治宇津ノ谷隧道	静岡県 静岡市、志太郡岡部町	明治37年	明治9年開通のトンネルを改修した道路用のトンネルで、煉瓦造の意匠に特徴がある。	土木	交通	1
旧九州鉄道 城山三連橋梁	福岡県筑紫野市	明治22年	九州で最も早い時期に造られた煉瓦造の鉄道橋。	土木	交通	1
駒橋発電所 落合水路橋	山梨県都留市	明治40年	3連アーチで河床を越える煉瓦造の水路橋。	土木構造物	生活関連	3
八ツ沢発電所 一号水路橋	山梨県大月市	明治45年	アーチ式の水路可動橋。鉄筋コンクリート造としては古い橋。	土木構造物	生活関連	2
芦安堰堤	山梨県中巨摩郡芦安村	大正5年	我が国で初めてセメントを用いた巨大な砂防堰堤。	土木構造物	治山治水	2
鹿留発電所 うそぶき水路呑口部	山梨県南都留郡河口湖町	大正7年	発電用水の水量を調整する取水口。石積みの特徴。	土木構造物	生活関連	2
羽根谷砂防堰堤（第一堰堤）	岐阜県海津郡南濃町	明治21年	オランダ人デレーケの指導と伝える 巨石を用いた堰堤。	土木構造物	治山治水	3
豊稔池ダム	香川県三豊郡大野原町	昭和5年	アーチを連ねた形態に特徴がある農業用ダム。	土木構造物	産業1次	3

土木史研究委員会幹事会報告

去る4月25日に幹事会が開催され、各小委員会からの報告事項のほか、検討事項について討議がなされた。特に今回は、第17回の研究発表会に関する確認のほか、次年度の論文募集スケジュールについてなど、研究発表会に関する議論を中心に討議がなされた。

平成9年度土木史フォーラム小委員会構成

委員長

武部 健一 (片平エンジニアリング)

幹事長

五十畑 弘 (日本鋼管)

常任委員

伊東 孝 (日本大学)

昌子 住江 (関東学院大学)

為国 孝敏 (足利工業大学)

月岡 康一 (川崎重工業)

藤井 郁夫 (東京鐵骨橋梁)

堀江 興 (新潟工科大学)

地域委員

岡林 隆敏 (長崎大学)

神吉 和夫 (神戸大学)

北浦 勝 (金沢大学)

清水 浩志郎 (秋田大学)

中岡 良司 (北見工業大学)

馬場 俊介 (岡山大学)

藤田 龍之 (日本大学)

松村 博 (大阪市都市工学情報センター)

宮本 裕 (岩手大学)

門田 博知 (広島工業大学)

事務局

石郷岡 猛 (土木学会)

小山 茂 (日本大学)

第17回土木史研究発表会報告

去る6月11日(水)から13日(金)にわたり第17回土木史研究発表会が日本大学工学部(福島県郡山市)にて開催された。最初の行事として11日午後に見学会があり参加者24名が安積疏水関係施設を見学した。行程では、まず安積疏水事務所(郡山市内)にて安積疏水の歴史や保存史料の説明を受けた後、猪苗代湖の疏水取水口、猪苗代湖の流出口にある十六橋水門などを周り、明治初頭の三大疏水事業の嚆矢に思いを馳せた。さらに帰路途中では地ビール館に立ち寄り大いに盛り上がった。

発表会は12日と翌日に掛けて3教室を3会場とし、総勢約170名参加のもと67件の発表が行われた(内、査読付は13件)。本年の発表会では特に鹿児島市の甲突川にある五大石橋についてのセッションが設けられ、両日とも活発な意見交換が行われた。また、毎年、発表会初日の昼休みに行われている土木史研究委員会が、本年はランチョン・ミーティング形式(=各自で弁当持参の会議)で、かつ発表会場の一つで行われた。委員会活動を公開することと広く意見を求めるために、一般の参加も自由とされ、形式張らない委員会会議が試みられた。

12日夕方には工学部スカイレストランにて懇親会が行われ約70名が参加した。来賓として日本大学工学部長の蓬田和夫教授を迎えた。同会途中には来年の開催校候補として小林一郎助教授(熊本大学)からの挨拶があった。

発表会は13日昼までにすべての日程が終了した。本年度の土木史研究発表会が盛大かつ滞り無く終えることができたことについて、多くの参加者ならびに関係諸氏のご協力に対して感謝の意を表する。

(日本大学工学部 藤田龍之
文責・知野泰明)

土 木 史 関 係 図 書

『伝えたいふるさとの石橋』

「建設技術をととして地域社会に貢献した先人達の証を(中略)何とか後世に伝えることが出来ればと願い」とは著者達がこの本を作った趣旨だという。この本では大分県内の全ての石橋560橋について、618枚のカラー写真とともに、それぞれの橋の位置図とともに適切な解説・由来・経過を含めて地域の文化として紹介されている。著者の一人岡崎さんは「大分の石橋を研究する会」の会員であり、高山さんは建設会社を経営される一方すぐれた写真家である。また薬師寺さんは技術者でありかつ写真家でもある。

土木屋のみならずあらゆる分野の方に読んでいただきたい本といえる。

書 名 『伝えたいふるさとの石橋』
A4判398頁

著 者 岡崎文雄, 高山淳吉, 薬師寺義則

発行所 高山総合工業株式会社

〒870-01人分市南鶴崎2-6-12

TEL0975-27-3171

FAX0975-27-3174

発 行 平成8年12月定価20000円

(消費税別, 箱入り)

第18回土木史研究発表会開催と論文募集

1. 主催：

土木学会（担当：土木史研究委員会）

2. 期日：

1998年6月11日(木)-12日(金)予定

3. 会場：

熊本大学工学部（熊本市黒髪2-39-1）

4. 部門構成：

（1）審査付部門（土木学会会員のみ）：

土木史研究編集小委員会において査読、審査の結果、現在の本学会の土木史研究を代表する水準にあると判定された論文に関する部門。

【注】本部門への投稿の詳細は、

土木学会誌9月号会告欄を参照して下さい。

（2）自由投稿部門（会員以外も歓迎）：

各発表者が発表に値すると考え、参加者との意見交換を行いたいと考える論文に関する部門。この論文は「土木史研究」に掲載しますが、査読審査は行いません。

5. 募集論文内容（両部門共）：

（1）論文テーマ：

自由（時代、対象、範囲等、すべて自由）。ただし、以下の点をご考慮下さい。

- ① 史実の正確さ：歴史辞典、人名辞典等に記載されていることは最低限照合して下さい。
- ② 比較評価：時代、地域、対象等が限定されている場合、そのテーマを過大評価しがちになるので、他の似たような事例を検討し、可能な限り比較評価を試みて下さい。
- ③ 論文引用：数百字に及ぶような引用は避け、引用にはできるだけ解説を付けて下さい。

（2）論文頁数：

12頁以内が原則（1頁2016字）。

ただし、最大16頁まで認める。

（3）使用言語：

日本語もしくは英語とします。

6. 審査付部門の論文投稿スケジュール：

直接論文を受け付ける方式です。

（1）論文原稿締切期日：

1997年11月4日（火）消印有効

（2）査読料：10,000円。

（3）論文の採否：1997年12月下旬

（4）採用論文の本原稿締切：

1998年1月26日（月）消印有効

7. 自由投稿部門の論文提出方法等：

事前に発表申込を受け付ける方式です。

（1）発表申込方法：

A4判用紙に「自由投稿部門」と明記し、

- ① 題目（副題も可）
- ② 発表者名・連名者名・所属
- ③ 会員種別
- ④ 連絡先・電話番号
- ⑤ 和文要旨（200字程度）
- ⑥ 過去の発表経緯
- ⑦ セッション分類（別記参照）

を記述して、FAXまたは郵送にてお申込み下さい。発表申込受付後、執筆要項等をお送りいたします。

（2）発表申込締切期日：

1998年1月26日（月）消印有効

（3）本部門に申し込まれた論文は、原則としてそのまま登載します。

（4）論文原稿締切期日：

1998年3月31日（火）消印有効

（5）著者負担金（掲載料）：

論文提出時にお支払い下さい。

6頁まで：18,000円

8頁まで：24,000円

10頁まで：30,000円

12頁まで：36,000円

14頁まで：48,000円

16頁まで：60,000円

（6）セッション分類：

〔I〕分類：

人物史、技術史、社会・経済史（制度史を含む）、土木史一般（考古、研究方法論等を含む）

〔II〕分類：

教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通（道路、鉄道等）、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物（橋梁、トンネル、ダム等）、防災、エネルギー、農業（灌漑等）、その他

8. 送付先および問合せ先：

土木学会土木史研究編集小委員会

（担当職員：石郷岡猛）

（〒160 東京都新宿区四谷一丁目無番地、

Te1.03-3355-3433 / FAX.03-5379-0125）

本年度から
論文原稿締切期日が
早くなりましたのでご注意ください

産業技術歴史展 『テクノフェスタ21』

1. 主 催：産業技術歴史展実行委員会
2. 後 援：建設省・通商産業省
・科学技術庁・文部省・文化庁
3. 協賛団体：土木学会・日本土木工業協会・他
4. 期 日：1997年8月8日(金)～28日(木)
5. 場 所：パシフィコ横浜・展示ホールB
6. 内 容：戦後50年間の間に飛躍的な発展
を遂げた国内産業技術への理解を深め、創造性を高めることを目指す。
7. 申込方法：会場にて入場券を購入できます
が、学会割当の無料入場券が多少あります
ので残部確認の上申し込み下さい。ただ
し、先着順締切。
8. 〒160 東京都新宿区四谷1丁目無番地
(社)土木学会事務局企画広報室産業歴史展係
TEL 03-3355-3433

セミナー『土木の歴史が語りかけるもの』

1. 主 催：(財)全国建設研修センター
2. 後 援：(社)土木学会
3. 期 日：1997年10月24日(金)
開場12:30 終了予定16:10
4. 場 所：シェーン・バツハ・サポー
(東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館)
5. 入場無料：定員300名(先着順)
配布資料：土木の絵本第1巻
国づくりと研修76号
7. 申込方法：往復ハガキに〒、住所、氏名、年齢
電話番号、職業を記入し下記宛先へ
〒102 東京都千代田区平河町2-6-2
ランディック平河町ビル5F
TEL 03-3222-9691 FAX 03-3222-9688
(財)全国建設研修センター 広報室
8. プログラム：
13:00 短編記録映画
「石を架ける～石橋文化を築いた人びと」
13:50 対 談
文学作品に見る土木の風景
杉本 苑子 氏(作家)
高橋 裕 氏(芝浦工業大学教授)
14:35 パネルディスカッション
失いたくない風景がある
～歴史遺産・なにを残し・どう生かすか～
パネリスト かこさとし 氏(絵本作家)
窪田 陽一 氏(埼玉大学教授)
高橋 裕 氏(前掲)
藤森 照信 氏(東京大学教授)
コーディネーター 阿川 佐和子 氏(エッセイスト)

編集後記：今回の土木史フォーラムでは、土木史に関連する世の中の動きをいろいろ紹介しました。土木を取り巻く環境は日々変化しており、フォーラムでも土木という枠組みにとらわれず過去から現在に受け継がれてきた重要な歴史・文化を将来に活かすための記事を積極的に取り上げて参ります。皆様のご支援をお願いします。

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No. 6
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 武部健一
事務局 日本大学理工学部 小山茂
〒274 船橋市習志野台7-24-1
TEL 0474-69-5219/FAX 0474-69-2581
E-mail: koyama@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

CONTENTS

- NEWS
Dispute over historical Kohtukigawa-river bridges
- FORUM
8th century road "Tozando Musashi-route" (HAYAKAWA Izumi)
- LOCAL NEWS
Re-construction of Shinsaibashi Bridge and the commemorative publication
Masonry work discovered at the remain of Kanazawa Castle
- OVERSEAS NEWS
"Nihon-bashi Bridge" at Hoian, Vietnam
- OTHER INSTITUTIONS
New organization established for the acceleration of heritage registration
Heritage registration under new system
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)
Meeting report
Committee member list
The17th Conference of CHSCE at Koriyama
- BOOK GUIDE
- CALL FOR PAPER
The18th Conference of CHSCE
- WHAT'S ON
Exhibition on industry and technology, "Techno-Festa 21"
Seminar "What we learn from civil engineering history"